

6) 位置テレメトリによるニホンジカのノマディズムの研究

林 勝治・河合雅雄・安藤 滋・東 滋
日本生態学会第16回大会 (1969)

7) Telemeter によるタイワンザルの activity と posture の分析

河合雅雄・三戸梅代・安藤 滋
第23回日本人類学会民族学会連合大会 (1969)

8) テレメーターによるリュウキュウイノシシの行動道跡

小野勇一・河合雅雄・三戸梅代・東 和敬
安藤 滋
日本生態学会第17回大会 (1970)

9) 野生ニホンザルのアクティビティの測定

河合雅雄・三戸梅代・東 和敬・小野勇一
同 上 (1970)

10) 光電トラップの生態学への応用

安藤 滋・河合雅雄・東 滋
同 上 (1970)

11) 地獄谷ニホンザルのオスの群間移動について

鈴木 晃
第14回プリマーテス研究会 (1970)

12) サバンナと森林のチンパンジーの比較生態学的研究

鈴木 晃
日本生態学会第17回大会 (1970)

総 説

1) 世界のサル

河 合 雅 雄
〔毎日新聞社(岩本光雄・吉場健二と共著)(1968)〕

心理研究部門

園原太郎・室伏靖子
浅野俊夫・渡辺允子

研究概要

1) 霊長類における視覚・聴覚に関する各種絶対閾値および弁別閾値の測定

室伏靖子・浅野俊夫・渡辺允子・南雲純治*

霊長類、とくにニホンザルの視覚・聴覚に関する閾値測定法を開発し、昭和48年度までに、少なくとも視覚に関しては、比視感度曲線、聴覚に関しては、周波数特性曲線の基礎データを収集する。

2) 切断脳と学習行動**

室伏靖子・浅野俊夫・渡辺允子

高等動物の大脳両半球の機能を明らかにすることを目的として、次の2つの側面から実験がなされる。

1. ヒトにおいて、瞬間的に呈示される光刺激が、2つの反応系(言語系と非言語系)によって、処理されるプロセスを、反応時間を指標として分析する。
2. 正常なサルが両半球をoptic chiasmaとcorpus callosumで切断されたときに示す行動の変化を、オペラントの手法を用いて分析する。

3) オペラント条件づけにおける各種強化スケジュールの検討(薬物効果***, 脳損傷を含む)

浅野俊夫

1. 各種基本スケジュールの累積記録の集録
2. コンピューターによるIRT分布の分析
3. 反応率と反応力(レバーを引く力)の比較分析
- 4) 弁別行動における諸要因の分析

渡辺允子

1. 動因と反応率との関係
2. 動因と外的刺激の手掛り性との交互作用
3. 刺激般化の問題

5) オペラント手法を用いた発達過程の分析

渡辺允子

1. FR, FI, VI, DRLのスケジュールに対する個体差
2. 自由場面におけるオペラント反応とその他の反応パターンの出現を時系的に分析する。

6) 情動行動の社会的役割

室伏靖子・南雲純治

動機づけのメカニズムを、動因、新奇刺激、嫌悪刺激、脳損傷または脳内電気刺激によって操作し、学習および自由な社会的場面における個体行動の変容と、その他の個体に与える効果を分析する。

研究発表(1968年4月~1971年3月)

学会発表

1) 初期経験と刺激選択

渡辺允子

日本心理学会第33回大会(1969)

2) 鏡映図形弁別におよぼす側頭葉損傷の効果

渡辺允子

日本心理学会第34回大会(1970)

3) ニホンザルの2種反応強化事象における Auto-shaping

河嶋 孝・小川 隆・浅野俊夫

日本心理学会第34回大会(1970)

4) 回避条件づけにおけるニホンザルの子期反応

室伏靖子

日本心理学会第34回大会(1970)

* 文部技官

** 本吉良治(京大・文)との共同研究

*** 井深信男(東教大・心)との共同研究

5) 遊び状況における個体間の距離

渡辺 允子
第15回プリマーテス研究会 (1971)

6) ニホンザルの牽引力および跳躍テスト

浅野俊夫・鈴木延夫
第15回プリマーテス研究会 (1971)

総 説

1) 学習における比較心理学的考察

室 伏 靖 子
〔講座心理学, 6, 本吉良治編, 学習, 238—256, 東大出版会 (1969)〕

2) 実験的行動分析 (Experimental Analysis of Behavior) におけるデータ集録システム

浅 野 俊 夫
〔心理学評論, 13, 2, 229—243 (1970)〕

生活史研究部門

杉山幸丸・小山直樹
田中二郎・大沢秀行

研究概要

1) 各種霊長類 (特にニホンザル) の個体群生態学的研究

杉山幸丸・小山直樹・大沢秀行

1. ニホンザルの自然群ないしは地域社会について, 出生, 死亡, 転籍, 年齢構成およびそれらの長年にわたる変動の資料を基礎として, 個体群の人口学的研究を進めており, さらにこれを摂食, 排出, 同化, 呼吸および成長などの個体の生物経済学的資料の収集と合わせ, ニホンザル自然個体群の生産生態学を志向しつつある。

2. 各種霊長類の自然環境下における生活内容を明らかにする一環として, 協同, 競争, 社会干渉などの個体間社会関係を中心とした行動の分析, および個体のたんなる集まりを越えた存在としての, 集団から個体への作用をとらえていく試みを通じて, 集団の構造や変遷をとらえる研究を進めている。

2) 狩猟採集民の生態人類学的研究

田 中 二 郎

現生狩猟採集民, とくに南アフリカのブッシュマンの生活を, 生息地の食物量, 摂食量, 行動量, 行動範囲から社会構造にいたる生態学的研究を進めており, これは究極的には1のテーマと関連させながら, 人類進化の過程における生活様式の復元を試みようとするものである。

研 究 発 表 (1970年9月~1971年3月)

論 文・総 説

1) 霊長類の適応と社会構造

杉 山 幸 丸
〔神経研究の進歩, 14, 547—550 (1970)〕

2) ブッシュマン

田 中 二 郎
〔思索社, 東京 (1971)〕

3) Changes in dominance rank and division of a wild Japanese monkey troop in Arashiyama.

Naoki Koyama
〔Primates, 11, 335—390 (1970)〕

変異研究部門

野沢 謙・江原昭善
和田一雄・西邨顕達

研究概要

1) サルの群れの遺伝学的構造に関する理論的研究

野 沢 謙

ニホンザルにはその社会構造の単位として群れの存在が確認されている。群れの遺伝学的有効サイズ, 群れ間の移出入率などは, ニホンザル集団の遺伝学的構造と動態を支配する重要なパラメーターである。従来から蓄積しているニホンザルの社会, 生態学的知見を利用して, これらパラメーターを定量的に明らかにしようとするものである。

2) 霊長類の免疫学的, 生化学的遺伝変異の検索

野 沢 謙

遺伝的多型現象の存在を明らかにし, その頻度分布をもとにして, サルの集団の構造と動態を統計的に解明せんとするもので, 現在は血液型と血液蛋白の遺伝変異を明らかにすべく材料の収集と検索を行っている。

3) 家畜化現象の集団遺伝学的研究

野 沢 謙

在来諸家畜とそれらの野生原種の遺伝学的野外調査, および家畜と野生原種の遺伝的交流に関する調査によって東亜諸家畜の起源, 源流を明らかにすると共に, 家畜化現象そのものの実態を解明すべく研究が続行されている。

4) ニホンザルの生態, 形態学的変異に関する研究

和 田 一 雄

志賀高原を中心にして下北半島, 白神山など積雪地帯のニホンザルの生活と形態の変異を調査している。無雪地帯のニホンザルのそれと比較して, ニホンザルの変異性, 適応性の特徴をとらえ, さらには, ニホンザルの起源の問題にアプローチすることを目標にしている。

5) ニホンザル自然群における個体の行動の研究

西 邨 顕 達

主として餌さづけされたニホンザル自然群を対象として, 個体の行動の分類および各単位行動と性, 年齢, 社